

平成 21 年 4 月 27 日現在

研究種目：基盤研究 C
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19592578
 研究課題名（和文）若年認知症者と介護家族の追跡による地域生活支援プログラムの開発と評価
 研究課題名（英文）Evaluation of Support Program by Long-term Follow up Survey of People with Young-onset Dementia at Home and their Family Caregivers
 研究代表者
 野川 とも江（NOGAWA TOMOE）
 埼玉県立大学・保健医療福祉学部・教授
 研究者番号：20104987

研究成果の概要：若年認知症者・家族介護者を追跡し、包括的な地域生活支援方法及びプログラムを開発・評価することを目的に、若年認知症者と家族介護者のセルフヘルプグループを形成・発展させ、個別能力開発としてアートセラピープログラムを4年間実践し効果測定した。結果、本人の認知機能の変化は病因による特性 感性は維持・向上 家族グループでは、相互の相談・支援機能の向上による地域資源の活用による地域生活支援効果が認められた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2008年度	1,700,000	510,000	2,210,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：若年認知症者、介護家族、追跡調査、地域生活支援、アートセラピー、セルフヘルプグループ

1. 研究開始当初の背景

我が国における若年認知症者及び介護家族の特性に応じた支援、ケア・サービスの開発・評価及び政策化は緒に就いたばかりであり、国内・国外における研究の集積は殆どない。若年認知症者および介護家族の特性を踏まえた、人間的・個別的な尊厳ある適切なケアと質の高い支援体制の構築は今後の重要課題である。

研究代表者は、2005年度～2006年度の科学研究費補助金を受けて、課題「初老期痴

呆者と介護家族の追跡による包括的な地域生活支援方法の開発」について、若年認知症者および家族介護者の双方のQOLをめざした包括的な地域生活支援方法を縦断的な追跡により開発し、地域生活継続の可能性を探り、支援のあり方、方法および必要な施策を明らかにするために研究を行った。2年間における研究活動の総括的評価を行った結果、1) 本人の能力開発と介護家族の参加交流のための非日常的な場としてのア - トセラピ - の意味と効果、2) ア - トセラピ - のプロセスの中で

過去の回想、経験を語り合う場面での仲間・関係者との相互交流による効果、3) 感性の表現によるアートセラピーの成果を本人、介護家族が相互に肯定的に能力を発見し認め合う体験の効果、4) 相互交流による家族のポジティブな変化と支え合いの効果が明らかとなった。

国際的な見地では、外国における若年認知症者対策の実情を把握するために、18年2月にスウェーデンに海外出張を行い、その対応の実態を把握した。個別ケアの尊重を提唱するスウェーデンでは、若年認知症者のデイケアやグループホーム等のサービスのプログラムが開発され、高齢者とは別途にサービス化されており、個別的なプログラムでの対応が行われていた。

以上の研究経緯と研究成果を踏まえ、さらに継続して知見を得ることにより、我が国の若年認知症者と介護家族の双方のQOLをめざした包括的な地域生活支援方法の開発と施策化に貢献できると考えた。

2. 研究の目的

本研究では、2005年度～2006年度の研究成果を発展させるための長期的・縦断的な継続研究として位置づけ、研究目的は、社会的に緊急的、優先的課題である若年認知症者および家族介護者の双方のQOLをめざした包括的な地域生活支援方法を縦断的な追跡により開発し、地域生活継続の可能性を探り、支援方法およびプログラムの開発を行い、必要な施策を明らかにすることである。

3. 研究の方法

- (1) 若年認知症者の発達とストレングスモデルの実践的展開により、セルフヘルプグループを形成・発展させ、個別の能力開発を目的としたアートセラピープログラムを4年間継続的に実践し、認知機能(NMスケール)、ADL(N-ADLスケール)、QOL(AD-HRQL-J)、行動観察(感性記録)を用いて効果測定する。
- (2) 介護家族グループでは、フォーカス・グループインタビュー法を用いて、発症当時の混乱期とその後介護プロセス、資源の活用と対処方法、必要とするケアやサービスについて明確化する。
- (3) さらに、介護家族のQOLの向上の視点から、若年認知症者を介護する家族のグループを継続的に運営し、セルフヘルプグループとしての機能を拡充し、広域的なネットワークによる介護家族の支援の展開に寄与できるよう組織的な活動の展開方法を開発するための相互交流を通して課題解決を図る。
- (4) 国際的な見地から、さらに外国におけ

る若年認知症者に対する社会的対策の実情を把握するために、スウェーデン等の福祉先進国における、その対応の実態を詳細に把握・分析し、諸外国における先進的な活動を我が国に導入できるかどうか等の政策的検討を行う。

(5) 総括と提言

以上の分析をとおり、若年認知症者及び介護家族の介護のプロセスと対処方法、当事者および介護家族のセルフヘルプグループの評価、地域資源としてのサービスの開発、施策のあり方を明確化し施策を提言する。

4. 研究成果

(1) 対象者の概要

2008年度の参加実人数は10名で、2005年度から継続4名(AD1名、TBI2名、ピック病1名)、2006年度から継続2名(AD2名)、2007年度から継続3名(AD3名)、2008年度から新規参加1名(ピック病)、男性7名、女性3名であった。その他の登録者は、施設入所後死亡1名(AD)、施設入所中1名(AD)、AD1名、TBI1名の計4名で、電話等で適宜相談に応じている。

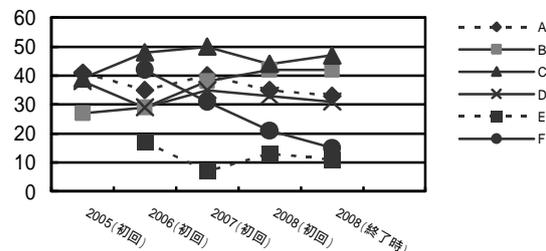
今回は、3年以上継続者の6名(A～F氏)について分析した。(表1)

表1 3年以上継続参加の若年認知症者の概要

	年齢(初年度)	年齢(発症)	性別	疾患名	アートセラピー参加年度
A	60	59	女	AD	2005-2008
B	57	53	男	TBI	2005-2008
C	57	55	女	TBI	2005-2008
D	54	53	男	ピック病	2005-2008
E	55	53	女	AD	2006-2008
F	59	56	男	AD	2006-2008

(2) 行動観察、スケール評価による検討

参加初回からのNMスケール評価点合計の経時的変化を図1に、また、参加初回とH20年度終了時のNMスケールと感性記録の項目毎の変化を疾患別に1例ずつ図2～4に示す。(A氏〔AD〕: 図2、D氏〔ピック病〕: 図3、B氏〔TBI〕: 図4)



NMスケール重症度評価点:

正常-48～50点, 境界-43～47点, 軽症-31～42点, 中等症-17～30点, 重症-0～16点

図1: 本人の初年度から終了時のNMスケールの変化

3年以上継続者本人の参加初回と終了時におけるNMスケールの変化では、AD 3例のうち2例（E・F氏）は、認知機能重症度評価点は低下し重症化した。

しかし、発症初期参加の1例（A氏）は軽症を維持し、「関心・意欲・交流」が中等度から軽度へと改善し、感性記録では全項目で向上していた。重症化した2例は、発症から2年以上経過後に参加し、F氏は、軽症から重症へ変化し、E氏は中等症から重症へ悪化しつつも、維持していた。しかも、重症化した2例の感性記録のうち、E氏は【器用度】以外は維持・向上し、F氏は全項目で維持・向上していた。

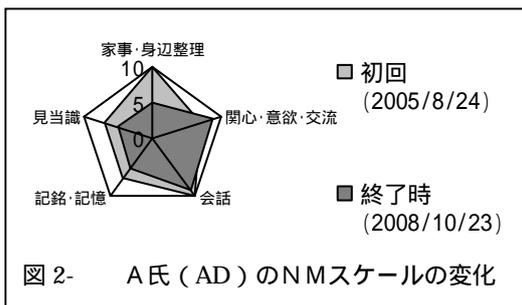


図2- A氏 (AD) のNMスケールの変化

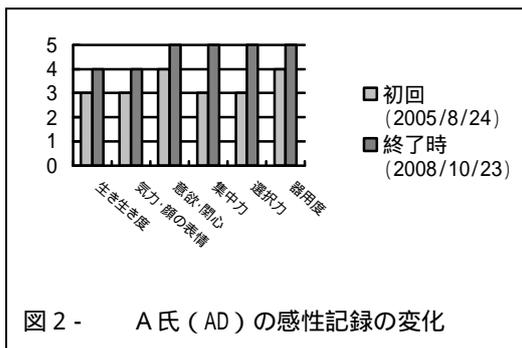


図2- A氏 (AD) の感性記録の変化

重症化したAD 2例のうち、E氏は中等度から重症に重症化しながらも、NMスケール評価点合計点は2年目以降維持していた。E氏は発症から2年以上経過後に参加しているが、参加初回と「記録・記憶」「見当識」が維持されていることが認知機能重症度評価点を維持している要因と考える。同じく重症化したF氏は、軽症から重症に極端に悪化していたが、参加初回と終了時の「記録・記憶」「見当識」を比較すると、それぞれ7点 1点、7点 3点と極端に低下していた。発症初期から参加の1例は、軽症を維持し、「記録・記憶」「見当識」は両方とも7点 5点に低下しながらも「関心・意欲・交流」が改善していた。これらから、ADにおける認知機能の変化は、発症から参加までの年数および「記録・記憶」「見当識」のある程度の維持が関連あると考えられた。

ピック病のD氏は認知機能重症度評

価点は低下傾向があるが、軽症を維持し、「記録・記憶」が中等度から軽度へと改善した。感性記録では、【気力・顔の表情】以外は、全て維持・向上していた。

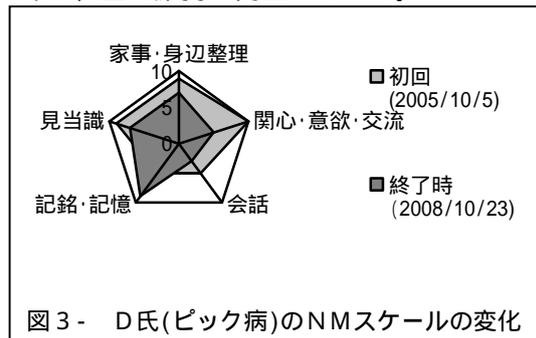


図3- D氏 (ピック病) のNMスケールの変化

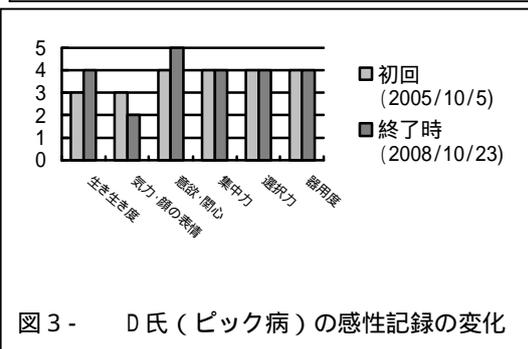


図3- D氏 (ピック病) の感性記録の変化

TBI 2例（B・C氏）は改善した。2例ともNMスケールの全項目で向上し、感性記録も全て維持・向上していた。

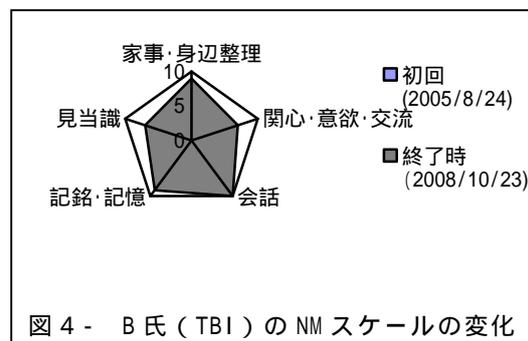


図4- B氏 (TBI) のNMスケールの変化

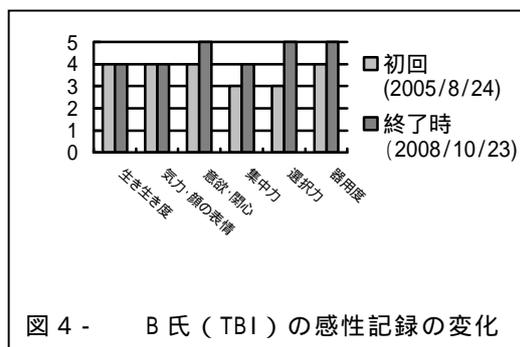


図4- B氏 (TBI) の感性記録の変化

これらより、ピック病例は低下傾向にあるものの軽症を維持、TBI例は発症から2年以上経過後に参加しながらも改善していたことより、病因による認知機能の変化の特性があることが示唆された。

(3) ストレスによる検討

本人と家族のストレス状態を、到着時とアートセラピー作品制作終了後直ちに測定した結果、本人と家族のアートセラピー前後のストレスでは、本人の平均値は前後とも高く、本人が重症者の場合、家族のストレスの値が高かった。

(4) グループとしての変化の検討

4年間の本人によるグループの変化は、アートセラピー運営、参加状況、スタッフ支援の視点でみると、H17年度終了頃から仲間意識が増加し、H19年度初期頃からお互いの協力と強調がみられた。H19年度終了頃からはH17年度から参加のA・B氏がリーダー的存在となり、リクリエーションの提案や他のメンバーの面倒をみるなど、自らグループを運営する行動がみられるようになった。H20年度は、新しいメンバーが増えた中、個性を發揮し情緒的に独立する状況が見られつつも、お互いの協力・強調性を維持していた。また、重症者メンバーも片付けに参加する等の行動がみられるようになった。

(表2)

表2 グループの変化 *グループ(表中G)を形成する対象者:メンバーと表記

	運営	参加状況	スタッフ支援
1年	スタッフによるプログラム・レクリエーションの計画と実施が中心	メンバーの緊張強く個々の作品制作に集中 意見の不一致からGに適合できない者有	積極的に運営を担う
2年	スタッフの支援中心だがメンバーからレクリエーションの提案がありスタッフと協力して素	継続メンバーが新メンバーに声をかける 気の合う者がG内で小G形成	主に運営を行い、メンバーの希望に沿う支援の
3年	作品制作中はスタッフ中心準備、片付けにメンバーが自ら参加し運営を開始 継続メンバーのうちリーダー的存在が出現し、自らレクリエーションを提案	小GではなくG全体のコミュニケーションが拡大 発声が上手く、いかなるメンバー等の話し相手になる継続メンバー有	意図的に準備・片付けをメンバーに依頼する声かけの実施
4年	H19年度と同様に作品制作中はスタッフ中心レクリエーションの開催は、リーダーが中心となって提案し、メンバーで決定	当事者同士で話したい、希望の表出やリクエストに応じた歌の披露等の言動有 重度メンバーも片付けに参加する。会の	準備・片付けの声をかけを継続レクリエーション提案の場のみ

(5) 国際的な見地からの検討

スウェーデンのストックホルム近郊自治体では、高齢者とは別に若年認知症者へのサービス及びプログラムがデイサービスやグループホームなどで2002年頃から開発されていた。若年認知症者の個性や強みを尊重したケア及び家族支援に重点を置いた実践活動が展開されていた。

また、若年認知症者と家族の支援は、若年認知症者の個性や強みを尊重したプログラムの開発、若年認知症者のニーズの把握と適切なケアの提供のための家族との対話・ネットワーク構築、家族支援を視野に入れた家族グループ運営などが行われており、若年認知症者の個性や強みを尊重したケア及び家族支援に重点を置いた実践活動が展開されていた。したがって、若年認知症対策が緒に就いたばかりの我が国における今後の若年認知症者と家族支援に対する活動に対して、多くの

示唆が得られると考える。

(6) 総括と提言

若年認知症者の発達とストレングスモデルの実践的展開により、セルフヘルプグループを形成・発展させ、個別の能力開発を目的としたアートセラピープログラムを4年間継続的に実践した結果、アートセラピーを3年以上と長期継続している本人の認知機能の変化は病因(アルツハイマー病、ピック病、頭部外傷後遺症)による特性があることが示唆された。感性は殆どが維持・向上しており、特に意欲・関心等の積極性・自発性の向上に一定の効果がある。グループとしての発達の展開がみられ、4年前の開設年度終盤には、「凝集」(仲間意識)だったが、3年目当初から「実行」(協力と強調)に移行し、4年目も維持・発達(個性の發揮と情緒的な独立)が認められた。家族グループでは相互交流により個々の課題に対する相談・支援機能は向上し、適切な地域資源やサービスの活用・開発及び対処方法の習得ができ、地域生活支援効果が認められ、地域生活継続を可能にしていると考えられた。本研究による成果は、事例数6例という限られた数での検討であったので、今後、さらに継続的な追跡とともに事例数を増やし数量的検討をしていくことが、今後の課題である。さらに国際的な見地を含めて、本研究活動を継続し、包括的な地域生活支援プログラム開発の必要があると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- 野川とも江:新時代の在宅ケア 若年認知症の人と家族の支援,在宅ケア学会誌,11(1):3-8,2007,査読有
- 奥山貴弘,野川とも江,酒井道久,野中美穂,鍋島次雄,黒木彩,西田清子,金子健二:初老期(若年)認知症へのアートセラピーの試み.日本認知症ケア学会誌;7(1):98-106,2008,査読有

〔学会発表〕(計5件)

- 奥山貴弘,野川とも江,酒井道久,野中美穂,小澤芳子,鍋島次雄,黒木彩,金子健治,西田清子:若年期(初老期)認知症者へのアートセラピーの2年間の試み 行動観察による5事例の評価,第8回日本認知症ケア学会,2007.10.12
- 野川とも江,酒井道久,野中美穂:スウェーデン調査による若年認知症者と家族支援方法の検討,第12回日本在宅ケア学会,東京都,学術集会講演集,71,2008.3.15

野中美穂, 野川とも江, 酒井道久, 奥山貴弘: 若年認知症者と介護家族のアートセラピー参加による介護者の態度・行動の変化, 第12回日本在宅ケア学会, 東京都, 学術集会講演集, 72, 2008.3.15

野川とも江, 酒井道久, 野中美穂, 奥山貴弘: アートセラピーへの継続参加による若年認知症者とグループの発達的变化, 第9回日本認知症ケア学会, 高松市, 講演集, 7(2): 417, 2008.9.27

野中美穂, 野川とも江, 酒井道久, 奥山貴弘: 若年認知症者の介護家族における介護負担要因の検討 - アートセラピー参加の若年認知症者と介護家族を対象として -, 第9回日本認知症ケア学会, 高松市, 講演集, 7(2): 418, 2008.9.27

〔図書〕(計2件)

野川とも江: 「若年認知症者と介護家族の包括的な地域生活支援方法の開発 - アートセラピーの実践・評価と今後の展開」, 大橋啓一 + 芸術造形研究所編, 認知症を予防・改善する臨床美術の実践 - 美術による地域福祉・社会貢献活動の展開!, 366-382, 日本地域社会研究所コミュニティ・ブックス, 2008.12

野川とも江: 平成19年度~平成20年度科学研究費補助金(基盤研究(c))研究成果報告書「若年認知症者と介護家族の追跡による地域生活支援プログラムの開発と評価」, 1-110, 2009.3

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野川とも江(NOGAWA TOMOE)
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・教授
研究者番号: 20104987

(2) 研究分担者

酒井道久(SAKAI MICHIHISA)
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・准教授
研究者番号: 30196050
野中美穂(NONAKA MIHO)
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・助教
研究者番号: 60404927
田口孝行(TAGUCHI TAKAYUKI)
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・講師
研究者番号: 20305428
小澤芳子(OZAWA YOSHIKO)(2005)
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・准教授
研究者番号: 60320769
奥山貴弘(OKUYAMA TAKAHIRO)(2005)

前埼玉県立大学・短期大学部・助教

研究者番号: 70412997

石崎順子(ISHIZAKI JUNKO)(2006)

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・助教

研究者番号: 60381430

(3) 連携研究者

該当なし